江戸期の滑稽俳諧（三）

伊藤浩睦

松尾芭蕉が始めた蕉風俳諧は、庶民の言葉で庶民の風雅を作って行こうとするもので、読み手を笑わせてやろうという要素を持たないものでした。『犬筑波集』、貞門俳諧、談林俳諧に一貫して流れていた滑稽の要素は消滅してしまい、俳諧は、笑いとは無縁な真面目なものになってしまいます。笑いを求めることを卑下する気分が芭蕉にもあったようです。

蕉風が談林を圧倒するようになった背景には、芭蕉が本拠地とした江戸の経済力が、元禄期になり大坂を抜いたという事情もありました。俳諧という文芸には金主の財力も重要なのです。

蕉風の大流行により消えたかと思われた滑稽俳諧ですが、宝暦から明和、安永といった時期に、名古屋に横井也有という滑稽俳諧の名手が現れます。徳川宗春による改革の後であり、この時期の名古屋の経済力は三都に次ぐものになっていました。

横井也有は、尾張徳川家で御用人や大番頭を務めた横井時衡の長男として生まれ、千石の家禄を継ぎ、本名は横井時般と言いました。御用人や大番頭という父親の経歴に加えて寺社奉行の職にも就き、五十三歳で隠居して八十二歳で亡くなるまで俳人として活動します。軽妙洒脱な筆使いの俳文はとても面白く、「借物の弁」を読んだ太田南畝が、感激して作者を捜し回ったという話も残っています。

この頃の俳諧は一句限りで笑いを取る構造であり、付け合いのなかで笑いを取る江戸初期の俳諧とは内容が異なり、現代の滑稽俳句に近いものです。

君よりは身のため寒し若菜売

着つつまだ馴ぬ袷やかきつばた

夜こそはかぞえし恋を百日紅

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

かんこ鳥啼や六日のあやめより

隠居家にかくし子鳴るや紙幟

うどんやへ銭のふり込む時雨哉

水仙やたけの子ほどは盗まれず

蓬莱に見るや浮世の慾ぞろへ

虫のねの掃れて遠し寺の庭

すり減らす秋や木賊に風の音

引越た鍛冶やの跡の寒かな

落椎のあたまに飛ぶや石仏

最初の四句は古歌や故事のもじり、次の四句は人の生き方への皮肉、後の四句はさりげない景色に潜む滑稽さを詠んでいます。

もし也有が職業俳人であったならば、この当時としては新趣向の滑稽俳諧を世に広めて多数の門弟を取り立て、マンネリ化してきていた蕉風俳諧に代わって新たな流行を作ることもあったでしょう。しかし、なにしろ元寺社奉行のご隠居です。個人としては面白がって滑稽句を作っていても、世間に広める気持ちはなく、尾張家に出仕している息子のことを考えれば、派手に世間の話題になることも避けていたようです。俳文集の『鶉衣』は、也有の死後、その面白さに感激した太田南畝の手で刊行されています。

滑稽な俳文をものにして、滑稽俳諧をやっていた也有にしても、笑わせる行為は自慢できるものではなく、隠しておきたい楽しみだったようです。

（完）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。